

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

ジャーナリスト芥川を取捨選択：
『支那游記』・「章炳麟氏」を例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-06-19 キーワード: 芥川龍之介, 『支那游記』, ジャーナリスト, 章炳麟 作成者: 邵, 若晨, Shao, Ruochen メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000497

ジャーナリスト芥川を取捨選択

—『支那遊記』・「章炳麟氏」を例に—

The choices of Journalist Ryunosuke Akutagawa:

Take *Mr. Zhang Binglin* as an example

邵 若 晨

キーワード：芥川龍之介 『支那遊記』 ジャーナリスト 章炳麟

Key Words: Ryunosuke Akutagawa *Shina Yuuki* Journalist Zhang Binglin

要旨

本稿は、芥川龍之介が中国旅行における「ジャーナリスト」という身分に焦点を絞り、『支那遊記』で描かれた中国知識人の形象とその内実を考察するものである。

芥川の「ジャーナリスト」身分は中国旅行限定の身分とも言え、その身分下の創作活動は大正時代のジャーナリスト観および派遣側の大阪毎日新聞社の対中意識等の外部要素に影響されやすいと考えられる。

そのため、本稿は「章炳麟氏」の節を例として、ジャーナリスト芥川が上述の外部影響下のジャーナリスト認識および中国報道を検討する。そのうえで、取捨選択による描かれた中国形象と実際状況とのずれを掘り出し、そのずれが生成した内実、そのずれと中国形象の構築および作品の趣旨のつながり等の問題点を検討する。このように、ジャーナリストという身分による作られたテキストの新しい価値を掘り出してみる。

Abstract

This paper focuses on Ryunosuke Akutagawa's status as a "journalist" during his travels in China, and examines the image and reality of the Chinese intellectuals portrayed in "Shina Yuuki".

Akutagawa's status as a "journalist" can be said to be limited to his travels in China, and his creative activities under this status are likely to be influenced by external factors such as the Taisho era view of journalists and the Osaka Mainichi Shimbun's attitude toward China.

For this reason, this paper will examine journalist Akutagawa's perception of journalists and his coverage of China under the external influences mentioned above, using the "Mr. Zhang Binglin" passage as an example. The paper will then examine the gap between the depicted image of China and the actual situation, and examine issues such as the reality that created the gap, the connection between the gap and the construction of the image of China, and the purpose of the work. In this way, we will try to uncover the new value of the texts

created by the status of journalists.

一、問題提起

1921年、芥川龍之介は大阪毎日新聞社の特派員として中国に派遣された。『支那遊記』は、「現代文壇の第一人者」、「新興文芸の代表的作家」、「支那趣味の愛好者」⁽¹⁾ 芥川が書かれた中国報道であるため、同時代から注目されてきた。

先行研究では、「芥川のいうジャーナリスト的才能は何であったか。(中略) 動きつつある中国、苦悩する中国、つまり現実の中国への熱い関心、もしくは猛烈な好奇心につき動かされての執筆というよりは、中国の風物、雰囲気、名所旧跡への興味がより強く働いての執筆となっている。(中略)『若き支那』の代表者李人傑の概要やその風貌は伝えても、その心の奥底に入りこんでの鋭い一瞥の記事はない」⁽²⁾、「小説家の見た中国であって、新聞が、もしくは新聞の読者が期待したかもしれぬような、支那の現在や将来を深く洞察したのではない」⁽³⁾ など、『支那遊記』における中国報道、とりわけ中国知識人との会見記述の不十分さに対する批判がよく見られる。それに対し、20世紀末頃、「上海で三人の文人政治家に会い、中国をめぐる様々な政治的議論を交わしたことは、芥川の帰国後の精神生活に強い影響を及ぼすことになる」⁽⁴⁾ など、中国知識人との会見を積極的に捉える研究が出てきた。

芥川にとって、ジャーナリストという身分は外部から与えられ、中国旅行限定の身分とも言える。ジャーナリスト身分の下の記述活動は、日常的な文学活動に比べ、当時の文壇や新聞社側等、いわゆる「外部要素」に影響されやすい、進んでいえば、芥川のジャーナリスト観、ジャーナリストの身分で「中国報道」を書く時の取捨選択等がそれら「外部要素」に左右されたと思われる。取捨選択による描かれた中国像は真実とずれがあるのは当然であるが、読者はそのずれが見られず、その表象を現実中国として扱い、要するに、その取捨選択された記述は読

(1) ここで使った三つの言い方はいずれも1921年3月31日付『大阪毎日新聞』に載せた「支那印象記 芥川龍之介氏—新人の眼に映じた新しき支那 近日の紙上より掲載の筈」という、芥川の中国旅行と中国紀行文を予告する記事による。

(2) 紅野敏郎、『近代日本文学における中国像』、有斐閣選書、1975年、p.92。

(3) 吉田精一、『芥川龍之介』、三省堂、1942年、p.211。

(4) 関口安義、『芥川龍之介とその時代』、筑摩書房、1999年、p.421。

者の『支那游记』評価、さらに日本社会の中国認識に影響を与えたと思われる。

以上の背景を踏まえ、芥川は中国知識人との会見記述においてどのような取捨選択をしたのか、彼の取捨選択により、どのような中国知識人の形象が描かれたのか、また、その表象と実際状況とのずれがどのように中国形象の構築および作品の趣旨につながっているのか等の問題点を提起する。

本稿は、ジャーナリスト芥川が「章炳麟氏」における取捨選択を考察する上で、そのずれが出た内実を検討し、ジャーナリストという身分下で作られたテキストの新しい価値を掘り出してみる。

二、大正時代のジャーナリスト観および大阪毎日新聞社の対中意識

芥川がジャーナリスト身分で書かれた中国報道を分析する前に、まず、大正時代のジャーナリスト観及び派遣側の大阪毎日新聞社側の対中意識という二つの外部要素を考察してみようと思う。

(一) 大正時代のジャーナリスト観

芥川と同じく小説家である水上瀧太郎は『三田文学』1918年1月号に、「貝殻追放 新聞記者を憎むの記」という文章を発表した。その中で、水上氏は当時の新聞記者、つまりジャーナリストに対する態度を、以下のように述べている。

自分は決して新聞記者を、社会の木鐸などと考へてゐないが、彼等が此の人間の形造る社会の出来事の報告者であるといふ職分を尊いものだと思ふのである。然るに憎む可き賤民は事實の報告を第二にして、最も挑発的な記事の捏造にのみ腐心してゐる。さうして新聞記者といふものに対して適當なる原因の無い恐怖をいだいてゐる世間の人々は、彼等に對して正當の主張をする事をさへ憚つてゐて、相手が新聞記者だから泣寝入のほかはないと、二言目には云ふのである。それをいゝ事にして強こはもてにもててゐる下劣なるごろつきを自分は徹頭徹尾憎み度い。(中略)

根も葉も無い捏造記事の爲に、幾多の家庭の平和を害し、幾多の人々の社会生活を不愉快にし、幾多の人の種々の幸福を奪ふ彼等の行爲を世間は何故

に許して置くのか。⁽⁵⁾

引用の部分からわかるように、水上氏は「新聞記者」、つまり「ジャーナリスト」を、「事実の報告を第二にして、最も挑発的な記事の捏造にのみ腐心してゐる」、「根も葉も無い捏造記事の爲に、幾多の人々の社會生活を不愉快」する等に夢中し、いわゆる「憎む可き賤民」という存在であると激しく批判している。

また、中村星湖は1917年10月に『新時代』で、「最近小説界の傾向」という文章を発表し、小説家とジャーナリズムについて以下のように述べている。

時代の推移につれて、さまざまの新人が勃興して来るのは当然であつて、その種の部分的の現象はちよいゝ見受けられないではない。例えば、(中略)、『白樺』の人々が、多少ジャーナリズムの道具に使はれた事実はあるとしても、それ々の面目を明瞭に文壇に表に現はして来た如きである。⁽⁶⁾

中村氏は20世紀20年代の日本文壇は「新人が勃興して来る」であるが、『白樺』同人のような文学者がジャーナリズムの道具として利用されることも確かであると述べている。この中村氏の論述に対し、「ここでの「ジャーナリズム」は、商業主義的存在として捉えられているようである」⁽⁷⁾と解釈した論点もある。

中村氏の冷靜的な論述に対し、ジャーナリズムが文学界に与えた悪影響を激しく表した論述もある。その例として、芥川とほぼ同時代の平林初之輔が1921年11月の『新潮』で発表した「一兵卒の立場から」という文章が挙げられる。

ジャーナリズムは何ととっても文学を悪化する。(中略)人類の幸福に関する問題には脱兎の如く勇を示した芸術家がジャーナリズムには処女の如き盲従を敢へてしてゐるのは錯誤の甚だしいものである。⁽⁸⁾

(5) 水上瀧太郎. 貝殻追放 新聞記者を憎むの記. 『三田文学』, 1918年1月号. 下線部は筆者による。

(6) 中村星湖. 最近小説界の傾向. 『編年体大正文学全集 第10巻 大正十年』, ゆまに書房, 2001年, pp.488-492. 初出は『新時代』(1917年10月). 下線部は筆者による。

(7) 相川直之. 伸吟する「Journalist」・芥川龍之介「上海遊記」序説. 『近代文学試論』(39): 21-33, 広島大学近代文学研究会, 2001年12月。

(8) 平林初之輔. 「一兵卒の立場から」. 『新潮』, 1921年11月. 下線部は筆者による。

下線部に見られるように、平林はジャーナリズムが文学、芸術に悪影響を及ぼしたことを批判し、さらに、芸術家がジャーナリズムの悪影響および要求に盲目に従ってはいけないと呼びかけている。

以上で、芥川が特派員として中国に派遣され、ジャーナリストという身分で中国報道を書いた前後の時期、芥川同様の文学者、更に言えば当時の日本文壇のジャーナリスト観が窺える。要するに、その時期の日本文壇において、ジャーナリズム及び新聞記者に対する批判が明らかに見られ、多くの文学者がジャーナリズムが文学活動に悪い影響を与えたという理由で、ジャーナリスト身分に反感を持っていたということが確認できる。

(二) 大阪毎日新聞社の対中意識

進んで、派遣側の大阪毎日新聞社の対中意識を見てみようと思う。

芥川が中国に来た1921年は、二十一ヵ条の要求から六年目、五・四運動から二年目にあたる年であり、当時の中日関係は極めて悪かった。当時の大阪毎日新聞は、『大毎』は「支那」を恫喝しつつ読者の危機感を煽る記事を掲載し続けたメディア⁽⁹⁾であり、「『上海游记』連載前後の『大阪毎日新聞』もまた、「日本」の利益を偏重し、「支那」を侮る言葉に満ちた空間であった⁽¹⁰⁾」というような存在であった。当社の対中意識について、「上海游记」が連載する前後、『大毎』に掲載された「支那」というキーワードに触れた新聞記事⁽¹¹⁾からも窺える。

例えば、ベルサイユ講和会議で山東問題が解決しなかったことによって、北京から「五・四運動」がはじまった。『大毎』はこの運動が発生した二日後の5月6日に、この運動について、「智識階級の暴挙だから無暗なことは行るまい」というように報じた。9月3日の朝刊第一面に、「北支饑饉救済の関税付加税の使途」という見出しで、「饑饉救済資金の大部分が行方不明となった」、「支那政府の無能と当該官吏の腐敗」という記事を掲載した。このような植民地支配下の動乱した中国に対する批判的・侮蔑的言説は、「上海游记」連載期間にも明らかに見える。

(9) 篠崎美生子。「上海游记」を囲む時間と空間。『芥川龍之介と上海』。恵泉女学園大学、2015年3月、pp.5-8。下線部は筆者による。

(10) 前引同様。

(11) 新聞記事の引用は神戸大学附属図書館—新聞記事文庫による。<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/np/> (2023年11月閲覧)。

1921年8月17日、「上海游記」第一回は『大毎』で掲載された。同日の朝刊第一面に、「この年の開催予定のワシントン会議において、再び山東問題が取り上げられ、アメリカが支那を国際管理に附せんとするが如き提議をするかもしれないとの憶測が飛び交っている様子」という記事が掲載された。また、一週間後の8月24日の朝刊で、「何処まで虫がよいのか底の知れぬ支那学生総会例に依つて日貨排斥も決議」という見出しの記事が掲載され、中国の全国学生総会が華盛頓会議に支那から提出すべき問題案を討議し、二十一カ条の廃棄や山東半島からの日本軍撤退ほか全九項目をまとめたほか、学生たち自身の「日貨排斥」を決議したことを報じた。これらの記事を通し、当時の『大毎』は中国を侮ることに限らず、中国民衆の排日運動を報じることによって、日本読者の中国および中国人に対する敵意を煽り、さらに、各国列強の中国進出を報じることによって、日本の「在中優先位置」が揺れているという危機感を煽る姿勢も明らかに見られる。

このように、当時の大阪毎日新聞社の対中意識が明らかに見られ、そのような態度を持つ新聞社に派遣された芥川の中国報道は、好意的に表すことが難しいと考えられる。

以上で、芥川が『支那游記』を書いた1920年代の日本文壇のジャーナリスト観、また、派遣側の大阪毎日新聞社の対中意識を明らかにした。芥川はそのような外部環境にいるため、彼のジャーナリスト認識と中国報道を書いたときの取捨選択がその環境に影響されたと考えられる。

三、芥川のジャーナリスト認識

芥川が中国に行く直前に書いた作品で、『奇遇』という小説があった。『奇遇』の冒頭部分で、登場人物の「小説家」と「編輯家」は次のような会話があり、二人はジャーナリズムと文芸との影響関係を言及した。

編輯家：支那へ旅行するさうですね。南ですか？北ですか？

小説家：南から北へ周るつもりです。

(中略)

小説家：(机の抽斗を探しながら) 論文ではいけないでせうね。

編輯家：何と云ふ論文ですか？

小説家：「文芸に及ぼすジャーナリズムの害毒」と云ふのです。

編集家：そんな論文はいけません。⁽¹²⁾

下線部からわかるように、小説家は「ジャーナリズム」が文芸に害毒を及ぼすという観点を持っている。それに対し、編集家、つまり、出版社側はその論点を厳しく禁止した。それは元々小説家としての芥川が、大阪毎日新聞社に派遣され、新聞記事を書く直前の、文壇におけるジャーナリスト批判と新聞社側の要求と期待に挟まれた状況で、矛盾的、無力的な心持の表しではないかと考えている。

また、芥川がジャーナリストという身分で中国報道を書くことに対する態度と考慮等は、「上海游记」を書いた時友達らとの書簡にも反映されている。

大正十年九月十四日付森鷗外・与謝野晶子宛の書簡で、芥川は大阪毎日新聞社員としての苦痛について、以下のように書いている。

(前略) どうも同人と云ふ名から生ずる束縛の感じが苦しいのです。たとひ実際は自由であつても兎に角同人一人前の責任を持つのが苦しいのです。いや、責任は持たなくても責任のありさうな気がする事がそれ自身もう苦しいのです。私はすでにその点では大阪毎日新聞社員と云ふ、厄介な荷を背負つてゐますですから、もうこの上にはなる可く気楽にしてゐたいのです。⁽¹³⁾

この書簡を通し、大阪毎日新聞社の社員として付与された「責任感」、それによって「荷を背負つた束縛と苦しみを感じていた芥川の姿が見られる。更に、彼が責任感に束縛されながら、新聞記事を書くことに対する抵抗も窺える。

一週間後、九月二十日付佐々木茂索宛の書簡で、芥川は「上海游记」を書くことについて、次のように述べている。

「上海紀行の諸体を兼備するはあゝする方が楽な故なり 小説は坂路を下る如く紀行は平地を行くが如し あたり前に書いてゐては筆者最も退屈なり

(12) 『芥川龍之介全集』第7巻、岩波書店、1996年5月、p.279-281。下線部は筆者による。

(13) 『芥川龍之介全集』第19巻、岩波書店、1997年6月、p.194。下線部、句読点は筆者による。

誤つて感心する事勿れ」⁽¹⁴⁾

言葉の達人としての芥川が、「上海紀行」を書くときに、「平地に行く」ことを避けるために、「諸体を兼備する」というように、普段小説を書くより苦勞し、ひどく骨が折れたことが明らかに読み取られる。

上引芥川の小説および書簡を通し、芥川が中国報道を書いた前後に持っていたジャーナリスト認識および中国報道を書くことに対する態度がわかる。まとめてみれば、それは小説家からジャーナリストへの身分の転換のなかで、当時の文壇におけるジャーナリスト観と新聞社側の要求・期待との板挟みになったことに由来する矛盾、圧迫感と無力感であると認められる。

四、章炳麟との会見記に見るジャーナリスト芥川を取捨選択

章炳麟は芥川が中国で最初に会見した知識人である。芥川は4月23日に上海の里見病院から退院し、章氏と会見したのはその直後の4月26日であった。いわゆる病み上がりの体で章氏に訪問したと考えられる。

「章炳麟氏」の節は、芥川と章氏二人の「対談」というより、むしろ章氏の一方的な発言と芥川の繊細な観察からなっていると**言ったほうが適切である**。その会見記録は章氏の書斎にかかっている鰐の剝製に対する描写から始まった。

章炳麟氏の書斎には、如何なる趣味か知らないが、大きな鰐の剝製が一匹、腹這ひに壁に引つ付いてゐる。が、この書物に埋まつた書斎は、その鰐が皮肉に感じられる程、言葉通り肌に沁みるやうに寒い。尤も**当日の天候は、発句の季題を借用すると、正に冴え返る雨天だつた**。其処へ瓦を張つた部屋には、敷物もなければ、ストオヴもない。坐るのは勿論布団のない、角張つた紫檀の肘掛椅子である。おまけに私の着てゐたのは、薄いセルの間着だつた。私は今でもあの書斎に、坐つてゐた事を考へると、幸にも風を引かなかつたのは、全然奇跡としか思はれない。

しかし章太炎先生は、鼠色の大掛兒に、厚い毛皮の裏のついた、黒い馬掛

(14)『芥川龍之介全集』第19巻、岩波書店、1997年6月、p.195。下線部は筆者による。

兒を一着してゐる。だから無論寒くはない。その上氏の坐つてゐるのは、毛皮を掛けた籐椅子である。私は氏の雄弁に、煙草を吸ふ事も忘れながら、しかも氏が暖さうに、悠然と足を伸ばしてゐるのには、大いに健羨に堪へなかつた。⁽¹⁵⁾

引用の部分を通し、芥川の繊細な観察が見られる。書齋を上上の瓦から下の椅子まで、いわば彼の目で短い時間で掴める細部まで記録された。しかも、部屋の飾り、芥川の座席、その日の天気等の記述を通し、この会見記述で何回も触れた「寒さ」という感覚にふさわしい環境を描き出した。進んで、章氏の初印象、特に「鼠色の大掛兒に、厚い毛皮の裏のついた、黒い馬掛兒」という服装、「毛皮を掛けた籐椅子」という章氏の座席等の細部を記録した。このように、この会見の始め、「寒さ」と実感する「煙草を吸ふ事も忘れ」た芥川と、「悠然」と雄弁していた章の比較対照が明らかに描かれた。

その後、「氏の話題は徹頭徹尾、現代の支那を中心とした政治や社会の問題だった」という文で章氏との対談の幕を開いた。この文を通し、二人の談話は「現代の支那を中心とした政治や社会の問題」をめぐって展開したことを予告し、読者の期待がより一層惹かれたと考えられる。進んで、芥川は当時の状況を以下のように記している。

勿論「不要」とか「等一等」とか、車屋相手の熟語以外は、一言も支那語を知らない私に議論などのわかる理由はない。それが氏の論旨を知つたり、時は氏に生意気な質問なぞも発したりしたのは、悉週報「上海」の主筆西本省三氏のおかげである。西本省は私の隣の椅子に、ちやんと胸を反らせた儘、どんな面倒な議論になつても、親切に通辞を勤めてくれた。

この記述を通して、二つのことが確認できる。一つ目は、芥川と章氏の交流は同行の西本氏の通訳によって完成したということである。二つ目は、芥川と章氏の間は、お互いに話をする、つまり「対談」という形であったということである。

(15) この節の原文引用は、特に指定がない限り、すべて『芥川龍之介全集』第8巻、「十一 章麟氏」、p.32-35 (岩波書店、1996年6月)による。下線部は筆者による。

更に、引用文の下線部からわかるように、芥川は章氏に「生意気な質問」を發したことがあり、更に、二人は「面倒な議論」をもしていた。しかし、この点については、後の会見記述とずれがある。

「現代の支那は遺憾ながら、政治的には墮落してゐる。不正が公行してゐる事も、或は清朝の末年よりも、一層夥しいと云へるかも知れない。学問芸術の方面になれば、猶更沈滞は甚しいやうである。しかし支那の国民は、元來極端に趨る事をしない。この特性が存する限り、支那の赤化は不可能である。成程一部の学生は、勞農主義を歓迎した。が、学生は即ち国民ではない。彼等さへ一度は赤化しても必ず何時かはその主張を抛つ時が来るであらう。何故と云へば国民性は、——中庸を愛する国民性は、一時の感激よりも強いからである。」

章柄麟氏はしつきりなしに、爪の長い手を振りながら、滔滔と独得な説を述べた。私は——唯寒かつた。

「では支那を復興するには、どう云ふ手段に出るが好いか？ この問題の解決は、具体的にはどうするにもせよ、机上の学説からは生まれる筈がない。古人も時務を知るものは俊傑なりと道破した。一つの主張から演繹せず、無数の事実から帰納する、それが時務を知るのである。時務を知つた後に、計画を定める、——時に循つて、宜しきを制すとは、結局この意味に外ならない。……」

上引のように、芥川がここで記したのは章の一方的な「雄弁」であつた。この部分には、章氏の發言と態度、しかも芥川が章氏の話聞いた時の感想という二つの注目点がある。章の發言内容の面から見れば、彼は「現代の支那は(中略)政治的には墮落してゐる」から言い始め、「不正が公行してゐる」という政治の問題、しかも、「猶更沈滞は甚しい」という学問芸術の問題を指摘した。進んで、このような実態を直面していた中国の国情と進路について、「支那の国民は、元來極端に趨る事をしない」という、後述中国人の「中庸を愛する国民性」のせいで、「支那の赤化は不可能である」というように、中国における政治道路の行方および

「赤化」と言われた共産党に対する、自分の見方を述べた。ここまで、章による中国社会、政治、更に中国の今後の動向と難点等に関する分析が記されたことにより、芥川が中国で最初に訪問した中国知識人である、章炳麟の革命思想家としてあり方が描き出された。後半部分の発言において、章氏は前の分析に基づき、自問自答をしようとするように、「支那を復興するには、どう云ふ手段に出るが好いか」という問題を言い出した。しかし、その自問の回答として、「(前略)時務を知った後に、計画を定める」という、曖昧的、ぼかした意見しか述べなかった。章の「雄弁」はこのようにびたりと終わってしまったが、その話の最後には、「……」がついていると気づいた。前の五里霧中といった感のある発言と合わせて考えてみれば、芥川は章氏の発言を記録した時、部分的に省略したと推測している。この点について、次の段落で更に考察しようと思う。章の態度から見れば、前半と後半の発言記録の途中で、彼が雄弁した姿が記された。「しつかりなしに、爪の長い手を振りながら、滔滔と独得な説を述べた」というように、傍若無人に自問自答していた姿、いわゆる傲慢な態度を持つ中国知識人・革命思想家の形象が描かれた。そのような態度を持ちながら、「滔滔と」机上の学説のような政治分析をしていた章氏を直面する芥川が感じたのは、「唯寒かつた」というように記された。更に、この節の結びには、芥川が当時自分の感覚を以下のように記した。

私は耳を傾けながら、時時壁上の鰐を眺めた。さうして支那問題とは没交渉に、こんな事をふと考へたりした。——あの鰐はきつと睡蓮の匂と太陽の光と暖な水とを承知してゐるのに相違ない。して見れば現在の私の寒さは、あの鰐に一番通じる筈である。鰐よ、剝製のお前は合せだつた。どうか私を憐んでくれ。まだこの通り生きてゐる私を。……

「時時壁上の鰐を眺めた」、「支那問題とは没交渉に、こんな事をふと考へたりした」という記述により、章氏の雄弁を聞きながら、意識が離れたという、相手がしゃべっている社会と政治問題についての分析に無関心、さらに言えば、章の話に軽蔑的な態度を持っていた芥川の様子が描かれた。しかも、この最後のところで、芥川は再び「寒さ」という、章との会過程を貫いた感覚を述べた。

以上で分析してきた章の言行記述と芥川が感じた「寒さ」について、多くの研

究者は、章氏の雄弁と芥川の「寒さ」との対比により、章氏の傲慢な姿が強調されたというように解説している。また、芥川が「寒さ」と感じた理由は、章氏の雄弁した姿に恐れられたが、その空洞的な発言内容に失望したというような分析もあったようだ。これらの解説は、いずれにしても、「章炳麟氏」の記述により、中国の政治問題と社会問題に関心と見解を持っていながら、態度が傲慢不遜であり、中国の進路に対する分析には建設性の意見が一切見られず、いわゆる机上の学説しか持っていないというような中国知識人・革命思想家の形象が示された、ということの意味していると認められる。前述のように、章炳麟は芥川が中国で最初に訪問した知識人であり、「章炳麟氏」の節は芥川の中国報道において最初に掲載された中国知識人との会見記である。そのため、読者が章氏を当時の中国知識人と革命思想家の代表者として捉えることが容易に想像し、更に、「章炳麟氏」という会見記が日本読者の中国知識人・革命思想家の形象作りに極めて大きな影響があったと考えられる。このような章氏の形象作りと作家本人の感想記録に対し、「眼前の政治的議論から意識が離れ、特に後者については空想の世界に遊ぶ」や、「芥川は寒さの余り、章炳麟の言うことを深く頭に留めなかった」など、芥川が中国政治と社会に無関心という点に対する批判が少なくない。しかも、芥川の政治無関心に対する批判に限らず、この節の記述により、章炳麟、さらに言えば、当時の中国知識人および革命思想家の全体像に、傲慢的、机上の学説しかできないなど、墮落したレッテルが張られた。その点に対し、「わずか少数の中国の怪人らをもって大部分のなおさら間違っている」⁽¹⁶⁾、「機智と諧謔と皮肉が百出して、つまらない読物ではないが、(中略)、支那の現在や将来を深く洞察し得たものではない」⁽¹⁷⁾というような批判的見解も少なくなかった。

しかし、原作で読み取られる傲慢的、机上の学説しかできないなど、墮落したレッテルが張られた中国知識人と革命思想家の形象は、実は芥川が『支那遊記』における章氏会見記を書いた時、ジャーナリスト身分の下の取捨選択により作られたものであると考えている。言い換えれば、この会見記で描かれた中国知識人

(16) 顔淑兰. 论夏丏尊对芥川龙之介《中国游记》的翻译[J]. 中国现代文学研究丛刊, 2018(04): 224-239. その論文から張若谷の評価内容を引用した。原作の初出は1926年5月27日の『申報』であり、後で『文学生活』(金屋書店、1928年5月)に収録された。文章の後の日付は十五・五・二十五(1926年5月25日のこと、筆者注)である。つまり、この評論は夏訳が掲載された直後に出たということを示している。

(17) 吉田精一. 『芥川龍之介』. 三省堂, 1942年, p.211

及び革命思想家の表象と、芥川が実際に接触した実況との間にずれがあると考えている。この点について、芥川の後日の作品から窺える。

1924年、中国旅行の三年後、芥川は「僻見」⁽¹⁸⁾ という作品の中で、章氏との会見と対談の内容を回顧しながら、章氏に対する評価及び自分がその会見で受けた衝撃を顧みた。

僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剝製の鰐をぶら下げた書齋に先生と日支の関係を論じた。その時先生の云つた言葉は未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる。——「予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない。」先生はまことに賢人である。僕は度たび外国人の山県公爵を嘲笑し、葛飾北齋を賞揚し、洪沢子爵を罵倒するのを聞いた。しかしまだ如何なる日本通もわが章太炎先生のやうに、桃から生まれた桃太郎へ一矢を加へるのを聞いたことはない。のみならずこの先生の一矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでゐる。桃太郎もやはり長命であらう。もし長命であるとするれば、暮色蒼茫たる鬼が島の渚に寂しい鬼の五六匹、隠れ蓑や隠れ笠のあつた祖国の昔を嘆ずるものも、——しかし僕は日本政府の植民政策を論ずる前に岩見重太郎を論じなければならぬ。

この文章からわかるように、章氏との会見、および章氏の発言は、三年の時間が経った1924年においても、芥川に「未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる」というような深い印象を残っていた。『支那遊記』の中で、章氏の一方的な発言を記録し、内容から見れば、「支那の赤化」や「国民性」等の政治問題に触れたような感じがしたが、実は通り一遍の話であり、本質的な内容が全然記されなかった。しかも、芥川本人がこの会見に対する感想や思考等も「唯寒かつた」という一言で概括されてしまった。しかし、「僻見」から引用した内容を通し、『支那遊記』の記述と実際状況とのずれが見られるようになった。

引用の部分からわかるように、芥川が章炳麟と会見した時、二人は「日支の関

(18) 芥川龍之介。「僻見」、『芥川龍之介全集』第11巻、岩波書店、1996年9月、p.199-200。引用の部分は「僻見」の「岩健重太郎」という章であり、この部分の初出は1924年4月1日発行の「女性改造」第三巻第四号である。

係)、つまり中日関係についての話をした。日本の新聞社の特派員として訪問してきた芥川に対し、章炳麟は自分が日本に対する不満を一向に隠せず、更に、「予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である」という、芥川に極めて大きな影響を与えた見解を言い出し、自分が日本の植民と侵略に対する批判を表した。その見解に対し、芥川は皮肉や批判をまじえず、「この先生の一矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでゐる」と、その論述を評価し、章をも「賢人」と賞賛した。しかし、二人のこの交流内容、進んで、章の「桃太郎」批判等政治的見解に対する芥川の評価は、『支那遊記』においては一言も記されなかった。

「偏見」が発表された四か月後、「日本中の子供のとうに知つてゐる話」に基づき、芥川が改編した「桃太郎」⁽¹⁹⁾という作品が、「サンデー毎日」に発表された。芥川の『桃太郎』は「桃太郎は必ずしも幸福に一生を送つた訳ではない」、「鬼が島の独立を計画する」等の改編により、前述「偏見」で桃太郎が嫌いだという章炳麟の談話を引いて、暗に日本の植民地政策を批判している。このように、芥川が章炳麟との会見で得た反侵略、反植民主義の姿勢が窺える。

その姿勢がより明らかに示されたのは、『侏儒の言葉』⁽²⁰⁾の「倭寇」という一節である。

「倭寇は我我日本人も優に列強に伍するに足る能力のあることを示したものである。我我は盗賊、殺戮、姦淫に於ても、決して「黄金の島」を探しに来た西班牙人、葡萄牙人、和蘭人、英吉利人等に劣らなかつた。」

この文章において、「優に列強に伍するに足る能力のある」というような芥川式の皮肉な表現を通し、「盗賊、殺戮、姦淫」、「黄金の島」を探す等の侵略行為を

(19) 芥川龍之介。「桃太郎」、『芥川龍之介全集』第11巻、岩波書店、1996年9月、p.158-166。初出は1924年7月1日発行の「サンデー毎日」第三年第二八号（「夏期特別号」）の「創作」欄である。

(20) 芥川龍之介。「侏儒の言葉」、『芥川龍之介全集』第13巻、岩波書店、1996年11月、p.27-103。この作品集の各項の初出について、全集同巻の後記（p.383）に、「1923年1月1日発行の「文芸春秋」第一年第一号（「創刊号」）から1925年11月1日発行の同雑誌第三年第一号まで、三〇回にわたり表記の題で、「尊王」の項を除き毎号巻頭に掲載」と記した。また、同後記で記された各項の発表年月により、ここで引用した「倭寇」の節は1925年5月に発表したという。

狙い、「倭寇」と称された日本侵略者及び日本植民主義に対する批判を表している。特に「黄金の島を探す」という侵略行為は、桃太郎の鬼が島への侵入と合致する。そのため、「倭寇」の節は前述「僻見」や「桃太郎」と同じように、芥川が章炳麟会見から得た政治的関心と日本侵略批判を表した作品であり、いわば『支那遊記』の延長線上の作品であると考えられる。しかし、以上で論じてきた三つのテキストで明らかに見られる章氏との会見によって感じさせられ、考えさせられたこと、更に、芥川本人の政治的関心とスタンスは、『支那遊記』「章炳麟氏」の節で全く記されなかった。

五、まとめ

以上の考察を通し、『支那遊記』の「章炳麟氏」の節は、芥川がジャーナリストという身分を意識しながら、章氏との会見過程と交流内容を取捨選択した後、新聞社側と日本読者に読まれようとする部分だけを記した「新聞記事及び中国報道」であると認められる。

「章炳麟氏」のテキストを分析する上で、中国旅行に基づいて書かれた、『支那遊記』の延長線上にある『僻見』、『桃太郎』、『侏儒の言葉』等の作品にもたどって検討してみれば、『支那遊記』で描かれた章をはじめとする中国知識人の形象は、実は芥川の実体験との間にずれがあったと認められる。具体的に言えば、「章炳麟氏」の節によって読者に示した傲慢的、机上の学説しかできない、墮落した中国知識人・革命思想家の形象、また、そのような中国知識人および中国現状に無関心した芥川の態度は、ジャーナリスト芥川の加工によって作られた表象である。『支那遊記』後の作品において、二人の革命性のあった議論や、その会見が芥川に与えた深い影響と印象等が一々記された。章氏との会見記述における取捨選択により、芥川がこの会見を通し持ってきた反侵略、反植民主義等、いわゆる政治的関心も隠されたと認められる。

前に考察してきた大正時代のジャーナリスト観および大阪毎日新聞社の対中意識、また、芥川のジャーナリスト認識および『支那遊記』創作期の姿勢と併せて分析すれば、そのずれができた内実が確認できる。それはまさに芥川が同時代の日本文壇のジャーナリスト観と新聞社側の期待を共に考慮した結果だと思う。具体的に言えば、「根も葉も無い捏造記事」を書かず、「ジャーナリズムの道具に使

はれ」ことを避け、「批評家の良心に従い」ながら、「読者の興味」や「輿論」に追随しない等、同時代の文壇における主流的なジャーナリストに対する批判と要求を意識しながら、「新しき支那を発見」し、芥川らの中国報道によって先進的な「日本」と墮落した「支那」を日本社会に伝えようとする新聞社側の意欲をも心がけている。さらに言えば、テキストによる描かれた表象と実情とのずれは、当時の文壇におけるジャーナリスト認識と新聞社側の意欲のずれに由来したと言える。そのようなずれに挟まれた芥川の記述は、当時の中国現状を反映する「良い中国報道」と言い難いが、その作家とジャーナリスト身分の間の韜晦こそ、『支那遊記』が時間の試練に耐え、多方面の研究によって新たな価値が掘り出される根本的な原因だと言えよう。

参考文献

- 紅野敏郎. 『近代日本文学における中国像』. 有斐閣選書, 1975。
吉田精一. 『芥川龍之介』. 三省堂, 1942。
関口安義. 『芥川龍之介とその時代』. 筑摩書房, 1999。
『編年体大正文学全集 第10巻 大正十年』. ゆまに書房, 2001。
相川直之. 伸吟する「Journalist」・芥川龍之介「上海遊記」序説. 『近代文学試論』(39): 21-33, 広島大学近代文学研究会, 2001。
篠崎美生子. 「上海遊記」を囲む時間と空間. 『芥川龍之介と上海』. 惠泉女学園大学, 2015。
顔淑兰. 论夏丏尊对芥川龙之介《中国游记》的翻译[J]. 中国现代文学研究丛刊, 2018 (04): 224-239, 中国现代文学馆, 2018。
神戸大学附属図書館—新聞記事文庫: <https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/np/> (2023年11月閲覧)。